日本財団 就労支援フォーラム NIPPON 特別企画

障害の重い人の「はたらく」支援フォーラム

in Osaka

きょうされんだからこそ

2018年10月27日（土）、大阪の千里ライフサイエンスセンター山村雄一記念ライフホールにて、【障害の重い人の「はたらく」支援フォーラムin大阪】を開催しました。当フォーラムは、日本財団が企画する「就労支援フォーラムＮＩＰＰＯＮ」（例年12月開催）の特別企画として開催しました。日本財団から、共同作業所づくりの歴史を通してブレることなく障害の重い人たちが「はたらく」実践を積み重ねてきたきょうされんに、このテーマでのフォーラムを打診いただきました。

会場には、全国各地から約200名の参加者が集いました。

「働きたい」が 社会を変える

基調講演は、～「働きたい」が 社会を変える～をテーマに元宮城県知事の浅野史郎さん（神奈川大学特別招へい教授）にご登壇いただきました。ご自身が厚生省に入庁された時期に、重症心身障害児施設を見学された際の率直な感覚、そこからグループホーム（精神薄弱者地域生活支援事業）や強度行動障害についての調査研究の予算化につながった思いを率直に語られました。

そして、津久井やまゆり園事件や優生思想を踏まえて、利用者の人権を守るためにわたしたちがすべきことをお話いただきました。

やはり障害のある人たちの姿から

実践報告一本目は、地元大阪のさつき福祉会・あいほうぷ吹田の仁木悟さんが『医療的ケアの必要な人への労働実践』をテーマに報告を行ないました。体のケアを大切にしながらも、職員との共感関係の中で、生産活動を通じて喜び合い、社会とのつながりをつくっていく実践が紹介されました。

二本目は、愛知のさくらんぼの会・さくらんぼの藤田紀子さんが『最重度の知的障害の人への労働実践』をテーマに報告しました。他害がある強度行動障害のある人が働くことを通して少しずつ変化していく具体例を通して、日々の実践の積み重ねの大切さを確認し合う内容となりました。

いずれの報告でも働いている障害のある人たちの頼もしい姿、輝く笑顔が印象的でした。

（文：松本 尭久）

わたしたちは最先端をいっている

基調講演、実践報告を踏まえて最後にシンポジウムを行ないました。パネリストには、実践報告をした仁木悟さん、藤田紀子さんに加え、滋賀大学の白石恵理子先生、そしてきょうされんの赤松英知常務理事が登壇しました。コーディネーターは浅野史郎さんが務められました。

白石先生からは「どんなに障害が重くても」という言葉の問い直しと、発達保障の視点からの提言をいただきました。仁木さんや藤田さんからは、「はたらく」ことの捉え方や実践を通しての悩み、職員間の連携・引継ぎの課題について発言がされました。

浅野史郎さんによる基調講演。

シンポジウムの様子。

発言する仁木さん。左は白石先生、右は藤田さん。

会場からも貴重な意見・感想が寄せられました。

赤松常務からは働いている本人をしっかりと真ん中においた実践の大切さ、そしてその実践を社会に発信していくことの重要性の確認がされるとともに、障害者権利条約の内容と照らし合わせながらの評価と課題について提起されました。

参加者からは「重度の人たちが働く姿そのものが歴史に刻まれていることを実感した」「これからをどう作っていくかを今わたしたちが問われていると感じた」という率直な意見・感想が出されました。

浅野さんは「50年前は障害の重い人が働くことなんて想像もできなかった。みなさんの実践は最先端を行っているんです。わたしたちは進歩していて、進歩に寄与しているという確信をもってほしい」と話され、濃密なシンポジウムが締めくくられました。

参加者の声（アンケートより）

○多方面からの議論が出され、すごく意義のあるシンポジウムでした。

○重度の人が働くということは、何かの価値を作り出していること、そのことに本人が主体的にとりくんでいることでもあることを学びました。

○最先端を実践、議論している自覚を感じられるフォーラムでした。